

厚生労働科学研究費補助金（健やか次世代育成総合研究事業）  
小児死亡事例に関する登録・検証システムの確立に向けた実現可能性に関する研究  
（主任研究者 溝口史剛）

分担研究 小児死亡発生時の法医学と臨床医の情報共有体制の構築に関する研究  
「千葉県内における Child Death Review の実現に関する研究」

分担研究者 岩瀬博太郎 千葉大学大学院医学研究院法医学教室  
研究協力者 千葉文子 東京大学大学院医学系研究科法医学教室  
猪口剛 千葉大学大学院医学研究院法医学教室

研究要旨

千葉県内における Child Death Review の実現を目指し、既設の「千葉県子どもの死因究明等の推進に関する研究会（別称：千葉県 CDR 研究会、CCDR 研究会）」において、千葉大学法医学教室で集積された小児解剖事例について、その情報を一般臨床医等に還元し、各事例について予防可能性等を議論した。一方で、千葉県内における小児死亡事例が適切に死因究明されるために、各病院でどのような行動をとるべきかという点についてガイドライン案を作成した。多職種による議論により、予防可能性が多面的に議論され、有益な情報が得られることが示唆されたが、そうした情報をどのように社会に還元すべきかという点については今後解決すべき課題であると考えられた。また、研究会開始後、小児事例の法医解剖数が増えたが、警察が研究会に参加することで、小児事例に対する警察の意識が変化した可能性が考えられた。

A. 研究目的

本研究は千葉県内において実効性のある Child Death Review を実現するための方策を研究することを目的としている。

B. 研究方法

千葉大学大学院医学研究院法医学教室は、千葉県内における異状死事例について、司法解剖、調査法解剖、承諾解剖といった法医解剖を実施している。法医解剖においては、解剖結果のみならず、薬物検査、血液生化学検査、DNA 検査といった諸検査の結果や、警察が調べた死亡までの経緯に関する

情報を総合して死因を判定している。一般の小児科医や救急医は、警察情報にアクセスすることが困難である場合が少なくないが、法医学教室における法医解剖においては、比較的容易に警察情報にアクセス可能であるのに加え、死因に関しても、解剖や諸検査の結果から判断するため、より正確に判定可能となっている。

千葉県においては、警察に届け出られた異状死が法医解剖に付される率は約 4%程度と日本でも低率であるが、一度解剖に回った場合、そこから得られる情報は濃密であるといえる。そこで、千葉県においては、

千葉大学法医学教室で解剖された小児事例を集積し、その情報を一般臨床医等に還元することで、各事例について予防可能性を議論し、実際の予防に役立てることを目指して、「千葉県子どもの死因究明等の推進に関する研究会(別称:千葉県 CDR 研究会、CCDR 研究会)」を平成 26 年に立ち上げた。

この CCDR 研究会において千葉大学法医学教室で解剖された事例を提示し、参加する法医学者、小児科医、ソーシャルワーカー、県警職員等とともに、予防可能性等を議論した。また、千葉県内における小児死亡事例が解剖されないことが多々発生していることから、そうした事例が極力解剖などで適切に死因が究明されるためのガイドライン案を作成した。

### C. 結果

以下の小児死亡事例について、予防可能性等が議論された。

- 硬膜下血腫で開頭術後 23 日に死亡した 10 ヶ月男児  
臨床的には身体的虐待が疑われたが、解剖結果では反復する外傷を示唆する損傷を認めず、単回の損傷でも形成可能と考えられた。
- 予防接種翌日にうつぶせ寝の状態 CPA となった 10 ヶ月男児  
解剖結果ではアレルギー反応による死亡は否定的だった。SIDS の可能性が考えられたが、ミトコンドリア呼吸鎖酵素活性の低下も指摘された。
- 就寝中にうつぶせで死亡した 4 ヶ月女児

解剖で生前指摘のない右冠動脈起始部異常を認め、不整脈で死亡に至った可能性と、布団上うつぶせで死亡していた状況からは窒息の可能性も考えられた。主に遺族への情報フィードバックについての課題が議論になった

- 1 週間前からの腹痛の訴え後に死亡した 5 歳男児  
解剖では宿便性イレウスによる腹部コンパートメント症候群をきたしていた可能性が示唆された。ネグレクト等で児相介入歴があったことから主に多機関連携についての課題が議論になった。
- 発熱後 1 週間で死亡した 9 ヶ月男児  
解剖で感染性心内膜炎による敗血症と診断された。母が自然派医療に傾倒し処方抗菌薬を内服させなかったことや受診の遅れがうかがわれた。主に医療機関へのフィードバックや社会的啓発について議論があった。
- インフルエンザ B の発熱後 7 日で死亡した 4 歳男児  
解剖でインフルエンザ B による劇症型心筋炎による死亡と考えられた。主に予防可能性や医学的フィードバックについて議論があった。
- 外来受診時に待合室で心肺停止となった染色体異常のある 5 歳男児  
解剖で歯突起分離と椎体骨折、化骨を伴う周囲の軟部組織の出血、環軸椎脱臼及び上位頸髄損傷を認め死因と考えられた。研究会に参加した主治医か

ら警察の把握していない交通事故受傷歴の情報が得られ、受傷機転の考察が深まった。

一方千葉県内の小児死亡事例が適正に死因究明をされるためのガイドライン作りについては警察対応ガイドライン、遺族対応ガイドラインの案が示され議論された。

#### D. 考察

各小児死亡事例について、一般病院から収集される情報のみで議論する場合に比べ、より正確な医学的死因と、より多くの警察から入手される情報を活用することができ、濃密な情報を元に予防可能性を議論することができた。また多職種からの意見が交わされる中で、法医学者間のみの議論では判明しえなかった予防可能性が提示されるなど、有益な情報を得ることができた。

しかしながら、そうして得られた有益な情報については、参加した小児科医の所属する病院においては予防策をとる契機になりうると考えられたが、広く社会に還元し、実際に予防していくのかという点については解決すべき課題として残された。

一方、県警職員が参加するようになった後、千葉県における小児死亡事例の解剖数

が増加したが、研究会に参加したことによる警察の意識の変化が反映された可能性が考えられた。

#### E. 結論

法医学教室において法医解剖に付された小児死亡事例を、小児科医や警察職員等の参加する研究会で提示することで、濃密なCDRを実施できる可能性が示唆された。解剖率を向上させることができれば、質・量ともに優れたCDRを実施することが可能になると考えられる。

#### F. 健康危険情報

該当なし

#### G. 研究発表

論文発表

なし

学会・シンポジウム発表

なし

書籍発刊

なし

#### H. 知的財産権の出願・登録状況

(予定を含む)

なし

